

千海研の皆様

このたび、「派遣教師の経験を生かす」「派遣教員がもつポテンシャルを活用する」
取り組み(研究)の一環として、「派遣体験を生かすアンケート」を実施します。



研究活動名 派遣教師の活躍の場を増やすための一考察

研究者 千葉大学教育学部附属教員養成開発センター 教授 松井 聡 (副センター長)

研究内容 大学と連携して、「派遣教師の経験を生かす」「派遣教員がもつポテンシャルを活用する」を
実践し、その可能性を探る。(派遣教師の活躍を促進する方策を考える)

参加方法 グーグルフォーム

締 切 第一次締切 7月25日(火) 最終締切 9月25日(月)

問 合 せ 松井研究室 (メールアドレス matsui@chiba-u.jp)

大学と連携して、「派遣教師の経験を生かす」「派遣教員がもつポテンシャルを活用する」ための可能性を探るという目的に賛同し、以下のアンケートに回答します。

氏名 () 現在の所属 ()

連絡先 メール () 携帯電話(任意) ()

在外の経験 (あり ・ 派遣中 ・ なし)

あり・派遣中の場合の派遣地・時期 1 (都市名) ・派遣年度 西暦 年度)
2 (都市名) ・派遣年度 西暦 年度)
3 (都市名) ・派遣年度 西暦 年度)

1. 在外でついた(向上した)力 下の枠内から3つ選択(番号) (. .)

2. 国内の教育現場で児童生徒につけたい力 下の枠内から3つ選択(番号) (. .)

3. 上記の「つけたい力」を意識して取り組んだ実践はありますか。 (あり ・ なし)

4. 上記「3」で「あり」と回答した方は、国際理解教育実践報告書(別紙)に概略を記入して、以下
にメールで提出してください。送信先：松井研究室(メールアドレス matsui@chiba-u.jp)

5. 国際性豊かな児童生徒を育成するという目的のために、「派遣教師の経験を生かす」「派遣教員がもつ
ポテンシャルを活用する」ために、あなたが考える有効な手立ては何ですか。

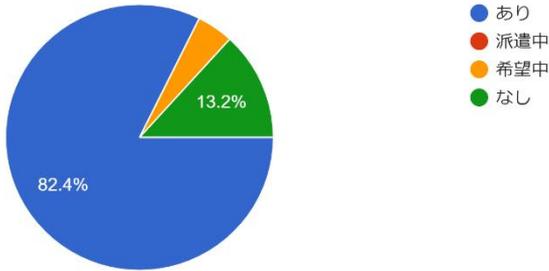
6. 大学との連携について、期待していることなどがありましたら、お知らせください。

★上記1・2は、以下の①～⑰の中から選び、番号で回答してください。

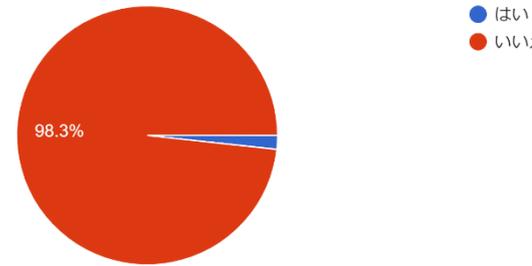
- | | | | | |
|---------------------|-----------|---------------|------------|----------|
| 知識 | ① 国際友好・平和 | ② 文化的多様性と共通性 | ③ 相互依存 | ④ 正義・公共性 |
| | ⑤ 共生 | ⑥ 持続可能性 | ⑦ 民主主義 | |
| 思考力・判断力・表現力 | ⑧ 批判的な思考力 | ⑨ 課題解決能力 | | |
| | ⑩ 想像力 | ⑪ コミュニケーション能力 | | |
| 学びに向かう力・人間性等 | ⑫ 人権意識 | ⑬ 寛容・共感 | ⑭ 協力・協調性 | |
| | ⑮ 誇り・自尊心 | ⑯ 社会・地域への参加 | ⑰ グローバルな意識 | |

派遣体験を生かすアンケート 集計状況（7月27日時点 回答数68）

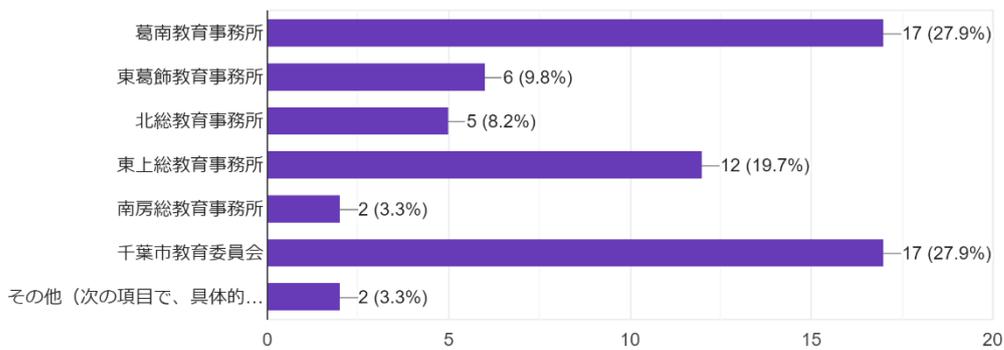
在外教育施設等の経験
68件の回答



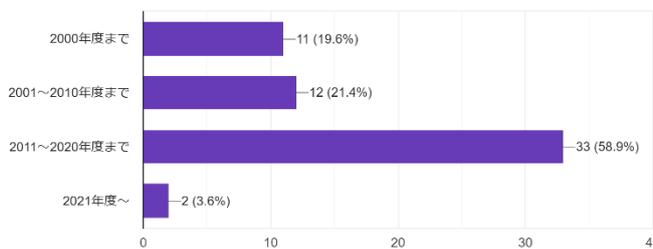
2回目の派遣はありましたか。
58件の回答



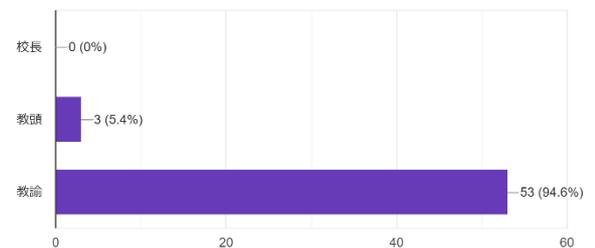
派遣当時の所属校の教育事務所等
61件の回答



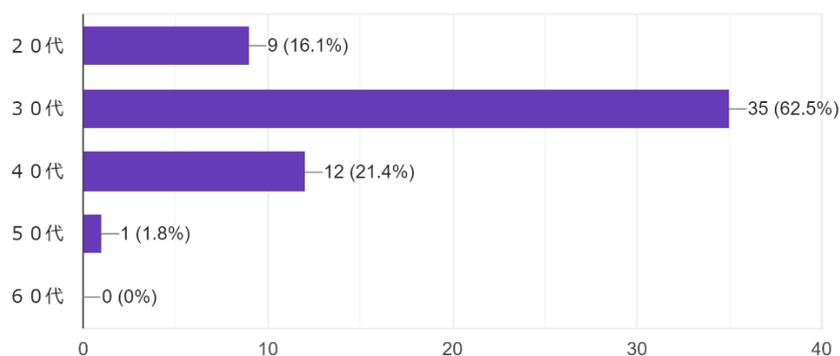
派遣年度（派遣された年度 西暦）1回目
56件の回答



派遣された職名 1回目
56件の回答

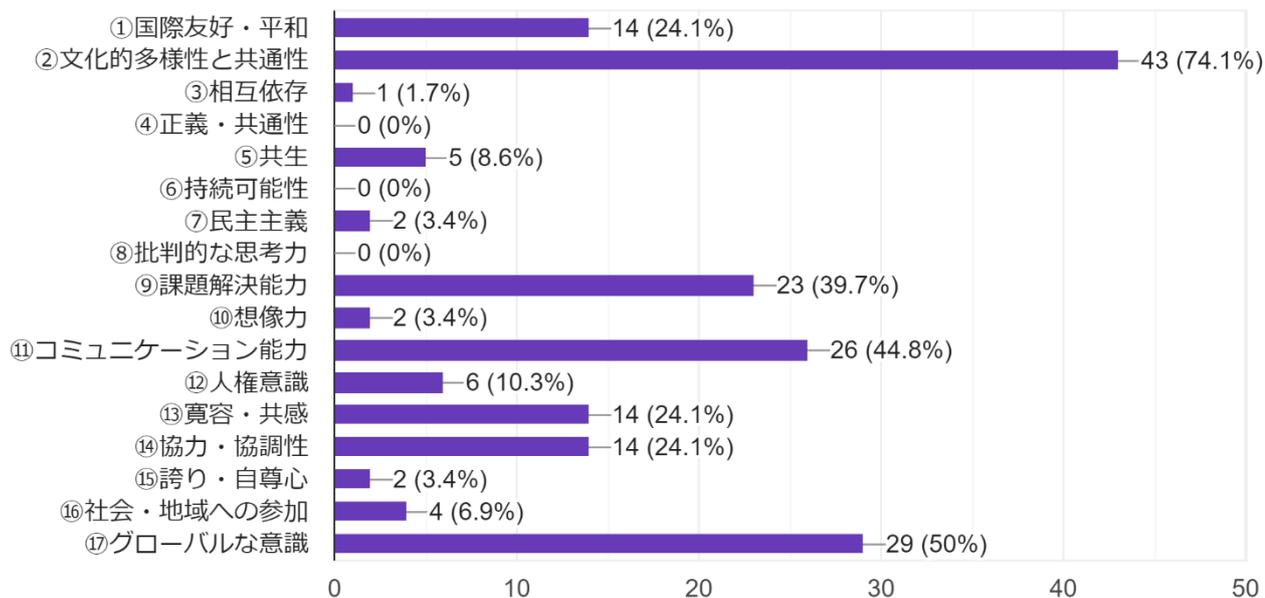


派遣された当時の年齢（派遣年度末の年齢）
56件の回答



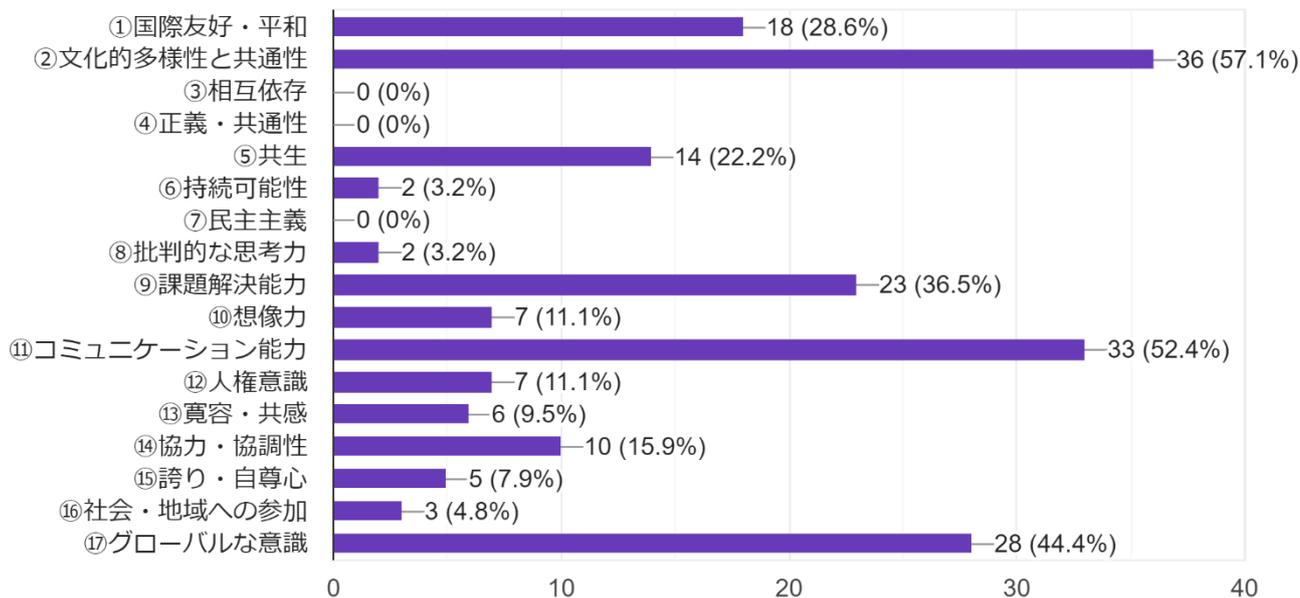
1. 在外でついた力（3つ選択）

58件の回答



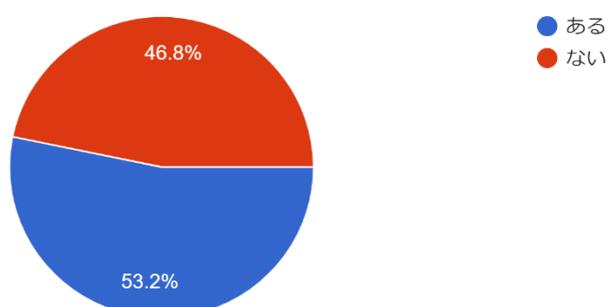
2. 児童生徒につけたい力（3つ選択）

63件の回答



3. 上記の「つけたい力」を意識して取り組んだ...にてお知らせください。（一人につき3回まで）

62件の回答



4. 「派遣教師の経験を生かす」「派遣教員がもつポテンシャルを活用する」ために、有効な手立ては何ですか。

発表する機会を与えてあげること

この経験を後輩に伝えていくことが大事なのではないかと思います。決して人数が多いわけではないのでこの繋がりを大切に地道に活動していくこと。

先生方のこれまでの実践を共有・各自治体への情報発信

派遣前に想像していたよりも、派遣先での経験を還元する機会が少なかったので、今回の大学での講話のように様々な形で還元していきたいと思いました。派遣先の学校との交流授業を通じた多文化理解や、帰国児童・外国籍児童の環境作りや精神的な支援なども、派遣教員ができる取組だと思います。

派遣教師の経験を語る場を準備する。聴衆対象は、帰国子女や学校関係者など。ポテンシャル活用は、帰国外国人が多い現場への勤務及び派遣

情報共有、連携

派遣教師をできる限り現地での経験をいかせるように、現地と同様の校務分掌および学年へ配置できると良いかと思っています。

派遣教員と、そうではなくても国際理解教育を行いたいと考えている教員を繋いで、輪を広げていけるような場所があるとよいかと。この千海研のHPがそのような場になるといいなと思っています。

派遣教師は海外に住み、異文化を肌身で感じる実践を行っていることから、国際理解教育を推進できると思います。生徒に派遣先での経験を話したり、文化による人々の考え方の違いや共通点を伝えたり、現地校とオンラインでつながり異国間交流をしたりと、日本の生徒に様々な働きかけができるようになるのではないかと考えます。また、海外から日本にくる生徒への支援や心のケアもしやすいのではないかと考えます。

派遣教員が派遣により経験したことなどを話す機会を作る。

英語専科のように特別活動（教科ではありませんが・・・）や総合的な学習の時間の専科として何校か兼務して勤務する。

新しい視点からの改革を断行する力。

日々、多様な外国人留学生と接すること、（現在接している）ベトナム、中国、スリランカ、ネパール、パキスタン、などの留学生への日本語、日本文化などの指導

校内研究での発表（教師、児童）

国際教育関係の指導者ポストを経験させる等、人事的配慮を行う。

派遣教員の経験を具体的に聞き出す

オンライン活動報告

派遣を通して身に付けた課題解決能力、共感力等の力を、授業を中心とした日頃の教育実践で積み重ねていくこと。特別なことではなく、学校や保護者、地域が期待していることを地道に行っていくことが大切であり、ポテンシャルを活用するという意味で有効であると思います。

ALTなど校内の外国籍人材（児童生徒含）の効果的活用

校内研修でそれぞれの経験を伝え、視野を広げる。

派遣経験のある教員とそうでない教員とが集まってコミュニケーションをとること

研修や講演

英語以外の言語圏の場合、郡部ほど活用の機会が無い。例えばスペイン語圏を核とした交流ができるような県単位の集まりがあれば、学校と行政（地域）と連携できるかもしれない。

自分の場合は語学指導

結局は教員に余裕があるかどうかです。実践したくても毎日の業務に追われてしまう日常があります。せっかく良い経験をしてきたので、それを児童生徒に伝えたいと思いますが、それを実践する「余裕がない」というのが現場で働く先生たちに共通している問題ではないでしょうか。

授業で生かす

もっと校内や校外で発表する機会を増やす。大抵の学校が、派遣から帰ってきて一度校内で発表して終わりになっている。

全市的に派遣教員の情報発信の機会・場を増やす。自校でのカリキュラムに国際理解教育を取り入れコーディネーターとして参画する。

異文化理解・異文化コミュニケーションを図る学習において、推進役となること。

派遣先と在籍校でのオンライン交流や発表などの交流活動を必須にする。

経験した事を積極的に他者に伝える(同僚や児童)、県外の教育事情について継続的に情報交換し、良い実践を取り入れる等。

各学校の研修やPTA・家庭教育学級等で在外教育施設やそこでの取り組みを紹介する。

研修会や授業などで、派遣先での経験を話す機会を設ける。

派遣機関での経験を日常の授業に反映していく

研修で学んだや、実践したことを、日本の教育現場でも再度実践する。

日本に帰国してから派遣教員としての経験を生かして、国際理解教育の実践を行なっていきたいと思っているのですが、なかなか学年や学校に理解を得ながら行うことの難しさにも直面しています。もしも、公開授業をさせていただいたり、実践内容をたくさんの先生方に知っていただく機会があるのであれば、学年や学校にも取り組みについて理解していただけるのではないかと思います。また、たくさんの先生方の実践を共有できる場(データ等をネットなどでも)増えたら嬉しいです。

市や校内の研修で国際理解教育の分野の授業を実践して、広げていく

国際理解教育コーディネーターのような役、分掌を作って研修や交流、関係機関との連携調整にあてる。

ケースによっては外国籍の児童生徒のサポート役なども行い、在外派遣経験者の力が発揮できるようにする。国際理解教育の重要性をアピールできる活動を一層推進する→本研究や千海研の活動を広く知らしめること。

派遣報告あるいは派遣に係る実践報告の場を設け、教職員への周知を図る。

相互交流できるネットワークの確立と、広く一般への紹介

研修会の設定

自らの経験を伝える場をもつこと。

学年や学校など、まずは近くの同僚に経験を伝える。国際教育の積極的な実践。

研修履歴等における派遣経験の位置付けの明確化

全校集会での講話

授業の中で自分の経験したことを話すこと

別の視点からのアイデアを出す

派遣教師による講話

講演などの依頼を積極的に受ける

授業や研修などの場で自分の経験を話すこと。

全国の先生方の授業実践等を体感して、日頃の授業づくり等

学校の状況にもよるので、なかなか難しいのが現状です。見えないところで生かされているような気はしますが、学校として全体としては疑問です。

教師も色んな経験で視野を広げて、その学びを生徒に伝えること

派遣教師が在籍している学校にとどまらず、各学校で行われている国際教育にアドバイザー（ゲストティーチャー）として参加する。そのために市町村レベルで人材バンクのようなシステムをつくる。直接その学校を訪問しなくても、オンラインによって当該校の児童とコミュニケーションをとる。各校の校長には、所属職員（派遣教師）に講師等の陽性があった場合、柔軟に対応できるよう、市教委を通じて理解を求める。

5. 大学との連携について、期待していることなどがありましたら、お書きください。

より質の高い教師が増えることを切に願います。

県内の様々な地域とのつながりが深まること

これまで、大学と連携して何か活動ができるという発想がなかったため、現時点ではアイデアが思いつきませんでした。今後、視野を広げていきたいと思います。

今現在、思いつくものはありません。

千葉県の国際理解教育について、目標や指導案の形式などスタンダードを作成していただけたら、そこを根拠に実践を行いやすいと思います。

自分の出身校で、海外での教育実践ができるプログラムがあり、海外に住む児童生徒や大学生に日本の伝統と文化を伝える授業を行いました。この経験が自分の国際理解教育をしたいという希望につながり、千海研への参加につながりました。

可能なら日本人学校視察など。

大学生と国際理解教育の推進について話し合うこと

今のところ、特にありません。

教員不足が叫ばれる中、第一歩が日本人学校の教員でも良いと思う。世界には多くの児童生徒が、皆さんの事を待っている現実わ、伝えたいです。またそれにより、学生たちは、動かなくてはならないと思います。

大きなテーマのもと、共同研究の場が設定されることが望ましい。留学生との意見交換や交流の場も欲しい。

将来的に海外派遣を希望する大学生との交流会があれば有意義なのではと思います。2

特に思いつきません。

留学生等との交流がもっと盛んになれば、より一層国際理解教育が進むと期待する。

大学生と国際理解教育の推進について話し合うこと

特になし

教員をめざす人材の育成

留学生等と学校の連携ができることよい。

外国人児童生徒の持つ課題の解決に向けて

実践交流 の機会

交換留学生と学校現場の連携。国際交流として、学校に来てもらう。

教育公務員を志望する学生の国際理解教育に対する意識を高めるため、県の教育振興基本計画にある「世界とつながる人材を育てる」ことに関連した講座を派遣教員の力を活用して充実させる。

学芸大学のように実践レポートを集約して、センター的な役割と、学生への在外派遣への周知・喚起
大学における在外教育施設での経験や取り組みの紹介。オンラインによる在外教育施設と大学の交流。
帰国まで、在外教育施設で経験したことを生かしたり認めてもらう場がなかったと感じています。今年
このように大学と連携することで、在外での経験が教育実践として発表されていくのかなと思うと、と
ても楽しみです。

実践で学べるカリキュラムの多様化* 在外教育施設での教育実習等

交換留学生の方等いらっしゃいましたから、現地の文化について教えていただき、こちらも日本の文化
について伝える交流などできたら嬉しいです。また、そういった活動を通して、公立小学校の国際理解教
育の意識向上にも繋がるのではないかと考えています。

大学との専門的な研究によって、国際理解教育の重要性について一層説得力のあるエビデンスが得られ、
これを広く周知することによって在外派遣や国際理解教育の重要性や立場が高まり、さらなる推進につ
ながっていくこと

所属校のなかでは決まった教育課程のもと、なかなか何か新しいことを立ち上げたり発信したりは難し
いので、大学等の教育機関と連携して環境を整えたり取り組みを推進していけることを期待します。

発表の場

現場を逼迫しない柔軟な相互交流

大学ならではの専門性と在外経験が相乗効果のあるような企画。

派遣経験を活かした具体的な実践の共有、学生に対して派遣制度を認知度を上げること。また、派遣先で
ない在外施設とのパイプ役になってくださればうれしいです。

様々な大学と国際交流がしたい

なし

実際の派遣教師による授業の受講

在外の日本人学校に興味を持つ学生との連携

日本から年に何回か現地視察等で生きた情報を共有する

国際社会の認識を共有することができる。

上記、人材バンクづくり。派遣教師活用実践例の集積と情報発信。